自我機能からみたあがりに関する研究

中 込 四 郎 (筑波大学)

鈴木 壮 (岐阜大学)

(昭和57年6月24日 受付)

Differences in ego function between high and low-stage fright in sport

Shiro Nakagomi¹

Masashi Suzuki²

Abstract

This study reports on the relationship between stage fright in sport and ego function as predicted from Rorschach protocols. According to scores on Ichimura's stage fright questionnaire, along with confirmation by persons such as coaches and teammates, two subject groups were chosen from among 122 college male athletes: the high-stage fright group (H-SF Group) consisted of 12 athletes with the highest scores, and the low-stage fright group (L-SF Group) those with the lowest scores. These two groups were compared by the Klopfer's Rorschach Prognostic Rating Scale (RPRS).

Both the raw and weighted scores in Sum (summation), FM (animal movement response), and FL (form level) showed significant differences between the H-SF and L-SF groups, and in M (human movement response) the difference approached significance. The L-SF group scored higher than the H-SF group in these categories.

The two groups were also compared on other scales. The L-SF group scored higher than the H-SF group on total responses (R), initial response time (R₁T), and average form level for each card.

In addition, one case representative of each group was selected from another sample (N=69), and they were examined in detail with the Rorschach test and in interview. The differences between these two cases were the same as those found in the first sample. And the subject with low-stage fright was more able to control emotional stimulus and livelier in mental activity than the other.

On the basis of these results, the subjects were considered from the standpoint of ego function. The L-SF group was superior to the H-SF group in sensitivity to inner impulse, reality testing, and the faculty of self-realization. Persons not suffering stage fright possess a strong ego with an active and rich inner world, an ego that is capable of handling anxiety

1 University of Tsukuba, Niiharigun, Ibaraki (305)

2 Gifu University, Nagara, Gifu (502)

derived from psychological objects and is active in adapting to the outer world (high growth motives).

The conclusion was drawn that the L-SF group has healthier ego strength than the H-SF group.

(Shiro Nakagomi and Masashi Suzuki, "Differences in ego function between high and low-stage fright in sport," *Jap. J. Phys. Educ.*, 28-2: 113-127, September, 1983)

問題と目的

“あがり” (stage fright, audience anxiety) という現象に対して、松井¹⁹⁾、松田¹⁸⁾等は、外界の圧力による自我体制の崩壊、あるいは自己統制が困難になった状態であるという見解を示している。そして市村¹¹⁾は、自我の対面している圧力を外界のみで考えるのには問題があるとして、内界に生起する無意識的逃避衝動の重要性を主張している。このようなあがりの心理的機制的説明がなされているにもかかわらず、その後この自我構造に注目して実証的研究を進めた者はいないようである。そこで、スポーツ場面において、あがる選手たちと、あがらない選手たちの違いを自我の機能 (ego function) より実証的に研究を試みようとしたのが本研究である。(本研究の中では、松井、松田等のあがりに関する定義に基本的には従っている。しかしながら、この中でとられている「……自我体制の崩壊」といった表現は、病理的な意味合いを伴って解されることもあるようである。そこで筆者等は、「一過性の自我の機能的不全」であると現象的にとらえ、さらに適応論的な立場から、あがりを防衛的な情緒的 自我反応 defensive emotional ego-reaction とみなすこともできると考えている。)

自我を機能 (function) としてとらえようとする立場は、言うまでもなく精神分析的自我心理学 (ego psychology) である^{5), 25)}。そこでは、多くの人たちの手によって、自我の機能が明らかにされてきている^{3), 10), 22)}。また、自我機能の健全さ、あるいは自我の強さ (ego strength) と呼ばれるものを操作的概念に置き換え、量的にとらえようとする試みがなされ、過去にいくつかの尺度が考案されてきている。その主なものを拾ってみると、質問紙法としては、Barron (1953)²⁾の Ego strength (Es) スケール、Block (1965) の自我弾力性 (ego resiliency) スケール⁸⁾、そして

Cattell (1958)⁷⁾による C⁻ 尺度 (ego weakness) がある。また投影法としては、Klopfer et al (1951)¹⁵⁾のロールシャッハ予後評定尺度 (Rorschach Prognostic Rating Scale, これを通常 R P R S と略し、以下ではこのように表記する。)がある。その中でも特に R P R S に関しては、Es スケールとの関係を扱った研究^{1), 9), 23)}、臨床尺度としての有効性を検討した研究^{4), 6), 13), 27)}等が数多く発表されている。これらの研究によって、R P R S の自我の強さの尺度としての一応の信頼性・妥当性を知ることができる。

本研究で用いる R P R S は、心理療法の予後判定の目的で作成されたものではあるが、近年になって、これを単なる予後判定のサインとしてではなく、上述のように自我の強さを測定するための 1 つの有効な尺度としての見方が強まってきた。真田²⁶⁾、永井ら²⁰⁾、そして田中²⁹⁾の研究は、予後評定として R P R S を用いたものではなく、自我機能の測定尺度としての有効性を踏まえながら展開されたものと言える。このような研究は、R P R S の活用範囲を拡げると同時に、自我 (ego) の機能によって理解することのできる事象の拡大を裏づけるものと言える。

運動選手のあがりに対して理解を深めていこうとした場合、「どのような時にあがるのか」といった状況因子も有力な手がかりとなる。また、市村¹²⁾が指摘した、「あがりという行動特徴は、心理的および生理的現象の複合されたものである。」といった見解も忘れてはならないところである。本研究では、あがりの状況依存的な側面を認めながらも、個々人の生育歴の中で形成されてきた、比較的安定した特質をもったパーソナリティ特性 (基本性格) による違いが、さらにそこに存在するのではないかと考えている。つまり、あがる選手とあがらない選手の相違をパーソナリティの違いに限定し、その違いをロールシャッハに投影される自我の強さ・健康さという観点から調べるこ

とにより, あがりの心理的機制を明らかにしていくことになる。

これまでに行われてきたあがる人のパーソナリティ診断は, 単にパーソナリティ特性—情動性が高い, 不安傾向が強い, 内向的である etc. —を現象的に測定, 記述するだけのものが多く, あがりの心理のダイナミックな過程を説明してはいなかったようである。ロールシャッハ・テスト (以下では, ロ・テストとする) は, 人格の深層で働いている意識されていない動機と現実行動との力学的因果関係 (ダイナミック) や人格機能を測定すると言われ, それによって, 運動選手のあがりに対してさらに理解を深めていくことができるものと思われる。

以下ではまず, あがる選手たちとあがらない選手たちの RPRS より導びかれる自我の強さを比較する。そして, 症例検討によって, さらに両者の自我機能の違いを詳細に検討していくことにする。

方法と手続き

(1) 対象者の選択

男子大学運動部員 122 名に対し, 市村¹²⁾の作成した「スポーツにおける“あがり”の特性」に関する質問票を実施した。この質問票は, あがりの構造を明らかにする為に, 市村 (1965) が文献・インタビュー等を通して運動選手のもつあがりの行動特性を収集し, 妥当性の検討を加え作成した 50 項目からなるものである。それぞれの質問項目は Fig.1 に示すような 5 段階に評定され, この得点の合計によって, あがりの程度を測定した。全対象者のこの質問票における得点の平均と標準偏差は, $M=25.7$, $SD=24.82$ であった。

(項目例) プレー中に失敗はしないかと非常に不安である。

Fig.1 Rating score of stage fright inventory.

この質問票の得点に基づき, 高得点者 (あがらない者) 15 名, 低得点者 (あがる者) 15 名をまず

抽出した。これを第一段階とし, 次に, 同一運動クラブ部員相互間で「あがりやすい人」, 「あがりにくい人」それぞれに該当する部員を 3 名ずつ記入することによる他者評定の結果を参考にした (各 3 名ずつと規定したが, その条件を満たした者はわずかであった。)。ここでは, 主観的評価に基づき抽出された各 15 名に対し, 複数者から逆の他者評定 (積極的否定) のなされた者をチェックした。その結果, 高得点者に含まれていた 1 名を削除することにした。又, 各運動部のコーチ, マネージャー等からの情報収集も行った。さらに, 付帯的条件として, レギュラー選手であること, そして高校時より同一運動種目を経験していることも条件として加えた。以上のような過程を経て, あがる群 (High—Stage Fright Group: H—SF 群と略し, 以下そのように表記する) 12 名, あがらない群 (Low—Stage Fright Group: L—SF 群と略し, 以下そのように表記する) 12 名の 2 群を最終的に対象者として抽出した。各群の質問票における得点の平均・標準偏差は, H—SF 群 ($M=-11.1$, $SD=9.78$), L—SF 群 ($M=63.0$, $SD=9.97$) であった^{注)}。

さらに, 事例検討の対象となる運動選手を選択する為に, 新たに上述した抽出母集団と競技レベルの類似する別の男子大学運動選手 69 名に市村のあがりに関する質問票を実施した。そして前述と同様な補足的情報を加え, 両群を代表すると思われる症例を 2 名ずつ抽出した。(本論文の中では, その中の 1 名ずつを事例として報告する。)

(2) ロ・テストの施行及び結果の処理

上述のようにして抽出された全被験者に, ロ・テストを個別的に施行し, 後半の 4 名の症例に関しては, 他にスポーツ場面へのかかわり合い方を中心とする内容の面接も行われた。分析は Klopfer 法¹⁷⁾に従い, 各被験者の RPRS を求めた。

この RPRS は先にも述べたように, 自我の強さやその健康さの指標とされるものである。Klopfer¹⁶⁾(pp. 561-98) は, 自我を組成する機能として, 現実検証能力 (reality testing), 情緒の統制 (emotional integration), 自己実現 (self realization), 現実状況の統御 (mastery of reality situation) の 4 つの要因を考えている。そし

Table 1 Stage fright, RPRS raw and weighted scores of each subjects.

Class	Case	Club	Stage Fright Score	Raw Score						Weighted Score						Group		
				M	FM	m	Sh	Col	FL	Sum	M	FM	m	Sh	Col		FL	Sum
L-SF	1	basketball	55	3.0	6.67	3.5	4.5	1.0	1.04	19.71	2	1	3	2.25	0.43	0.04	8.72	II
	2	rugby	64	2.0	1.67	0	-1.5	2.5	0.82	5.49	1	0	0	-0.9	2.5	-0.18	2.42	III
	3	rugby	52	5.33	8.17	2.5	1.0	1.0	1.16	19.16	3	1	1	1.0	1.0	1.16	8.16	II
	4	judo	79	3.0	5.33	3.0	2.5	3.5	1.27	18.6	2	1	3	1.88	2.63	1.27	11.78	II
	5	handball	74	9.83	7.33	1.0	2.0	2.5	1.27	23.93	3	1	1	1.2	2.5	0.27	8.97	II
	6	badminton	56	5.0	4.83	1.5	5.0	0.5	1.29	18.12	3	1	1	3.0	1.5	1.29	10.79	II
	7	basketball	65	0	2.67	3.0	1.5	1.5	0.9	9.57	0	0	3	0.75	1.5	0.4	5.65	III
	8	soccer	53	7.83	10.33	0	1.5	2.0	1.08	22.74	3	1	0	1.13	1.2	-0.42	5.91	III
	9	volleyball	63	3.0	3.0	1.5	-1.0	0.5	0.72	7.72	2	1	1	-0.27	1.5	0.72	5.45	III
	10	ski	64	7.5	2.33	0	4.5	-1.0	1.13	14.46	3	1	0	2.7	-1.5	1.13	6.33	III
	11	kendo	52	3.17	3.67	0	-0.5	0	1.17	7.51	2	1	0	-0.75	0	0.17	2.42	III
	12	basketball	79	4.83	5.17	0.5	-1.5	1.0	1.02	11.02	2	1	0	-2.25	1.5	1.02	3.27	III
HSF	13	volleyball	- 8	2.0	0	0	1.0	0	0.77	3.77	1	-1	0	1.5	0	0.77	2.27	III
	14	ski	- 8	0.83	3.5	2.5	1.5	0.5	0.46	9.29	0	0	1	0.64	0.38	-1.04	0.98	IV
	15	baseball	-11	2.67	1.5	0	1.0	1.5	0.61	7.28	1	0	0	3.0	2.25	-0.39	5.86	III
	16	rugby	- 1	-0.17	3.17	2.5	0.5	1.5	0.78	8.28	-1	0	1	0.75	2.25	0.78	3.78	III
	17	basketball	-25	3.5	0.67	0	1.0	0.5	0.69	6.36	2	0	0	3.0	0.5	-0.81	4.69	III
	18	baseball	- 5	5.5	2.0	1.0	0.5	0	1.12	10.12	3	1	1	1.5	0	0.12	6.62	III
	19	rugby	- 4	2.33	1.67	0.5	2.0	0	0.72	7.22	1	0	0	1.0	0	-0.78	1.22	IV
	20	track & field	-32	-3.67	1.17	0	0	0	0.34	-2.16	-1	0	0	0	0	-1.16	-2.16	IV
	21	kendo	-20	5.5	0	-1.0	2.0	-0.5	0.77	6.77	3	-1	-1	1.5	-0.75	-0.73	1.02	IV
	22	basketball	- 3	5.33	5.67	1.5	-2.0	2.0	0.37	12.87	3	1	1	-2.0	2.0	-1.13	3.87	III
	23	soccer	- 3	2.0	3.0	0	0.5	1.5	0.68	7.68	1	2	0	0.75	1.5	-0.32	4.93	III
	24	track & field	-13	4.0	0	1.0	1.5	2.0	0.94	9.44	2	-1	1	1.13	3.0	0.44	6.57	III

て, これらの機能を総合的にとらえるためにロールシャッハ反応を, [M]人間運動反応, [FM]動物運動反応, [m]無生物運動反応, [Sh]濃淡反応, [Cl]色彩反応, [FL]形態水準の6個の下位項目を設定し, RPRSを作成した。このRPRSの得点化への具体的な方法については, Klopfer et al (1951)¹⁵⁾の発表したものを河合¹⁴⁾, 小川²³⁾等によって翻訳されており, それを参考にした。

結果と考察

(1) RPRSによる比較

Table 1は, あがりに関する質問票からの得点と, RPRSを構成している各要素について得た粗点, 加重点の値を個人別に示したものである。なお, あがりに関する得点は, Fig. 1で示した

ように高得点の者ほど, あがりの徴候が少ないことを意味している。

さらに, 個人別のRPRSの各要素について, L-SF群, H-SF群両群のM, SDを求め, Yatesの修正によるカイ2乗検定を実施し, 比較したのがTable 2である。明らかに統計的に有意な差の見られた項目は, 粗点では, FM ($P < .05$), FL ($P < .01$), Sum ($P < .05$)であり, 加重点の場合では, FM ($P < .05$), FL ($P < .05$), Sum ($P < .05$)であった。これらはいずれもH-SF群よりもL-SF群の方が高い値であることを示している。また, 統計的に有意とは言えないがその傾向を示すものとして, 粗点及び加重点のM反応 ($P < .10$)をあげることができる。

Table 2 Comparison of L-SF Group and H-SF Group.

Item	Class	C. O. P.	L—S F		H—S F		X ²
			Mean	S D	Mean	S D	
RPRS Raw Score							
M		2.9	4.54	2.77	2.34	2.74	*
FM		2.2	5.10	2.63	1.86	1.72	* *
m		1.4	1.38	1.33	0.67	1.07	
Sh		1.4	1.50	2.34	0.72	1.09	
Col		0.9	1.25	1.23	0.75	0.89	
FL		1.0	1.07	0.18	0.69	0.22	* * *
Sum		10.0	14.84	6.37	7.24	3.71	* *
RPRS Weighted Score							
M		1.9	2.17	0.94	1.25	1.42	*
FM		0.9	0.83	0.39	0.08	0.90	* *
m		0.9	1.08	1.24	0.33	0.65	
Sh		0.9	0.81	1.59	1.06	1.31	
Col		0.9	1.23	1.17	0.93	1.21	
FL		1.0	0.57	0.60	-0.35	0.72	* *
Sum		5.0	6.66	3.10	3.30	2.68	* *

Class L-SF: Low-Stage Fright Group

Class H-SF: High-Stage Fright Group

C.O.P.: cut off point

* $P < .10$

** $P < .05$

*** $P < .01$

まず, RPRSの結果の解釈においては, 総点(Sum)に注目しなければならない。Klopferは加重点の合計(Sum)は自我の諸機能の統合状態を反映するものと考え, それは自我の強さや健全度を測定しているといった解釈仮説を提示している。このことは, その後の多くの研究によって支

持されているようである。したがって本研究の結果より, 運動場面においてあがりを多く経験する選手たちよりも, 自我の強さといわれる精神機能全般において, あがらない選手たちの方が優れているとすることができる。このように自我の健全度が高いということは, 精神的負担への耐性も高

いことが予想される。つまり、試合のような心理的ストレスの高い場面に出合っても、自我が葛藤にまきこまれたり防衛的になることが少なく、より現実適応的な行動をとるよう機能することになる。

次にRPRSを構成している成分の各々について検討することにする。[M]人間運動反応は、内的安定性 (inner stability) の指標で、情動の内的統制の資質をみるものである。また、Mは自己受容とか共感性を示すとともに、それらを背景としてさらに高次の自己実現の能力とも関連すると考えられている。このようにM反応に付せられた解釈仮説は多様であり、自我機能の多くの側面に触れているようである。したがって、M以外の他の決定因子を考慮しながら解釈することが必要となってくる。ここでは統計的に有意な差をもってL—SF群の方がH—SF群よりも高い値であるとは言えなかったが、その傾向を認めることができた。ここで注意しなければならないことは、H—SF群においてもMに関する粗点(2.34)、加重点(1.25)の平均値はともに決して精神的疾患を疑うほど低いものではない。このことは、本研究の被験者が、日常生活場面に適応している者で、いずれも正常レベルであること。また、H—SF群を抽出する過程で、あがりを中心とする問題行動を自から特に訴えて集まった者ではないことなどに原因すると考えられる。

Klopper の自我発達図式 (Klopper¹⁶⁾(p.569))より、上述の[M]反応から推察される自我機能をより高次のものとする、[Sh]濃淡反応は、それらへの自我機能発達の母体ともいえる基本的安全感を反映するものと考えられている。このような基本的な次元での自我機能に関して、両群を比較したところ明確な差は見られないようである。

次に[F]動物運動反応について検討を加えてみることにする。Klopper の解釈仮説(Klopper¹⁶⁾(pp.561-98))によると、FMは本能的欲求や内的衝動性の知覚であると言われており、粗点、加重点ともにL—SF群の方がH—SF群よりも有意な差をもって高い値であることを示した。このような内界の動きを知覚することが、現実行動で生かされる為には、単に自覚する力が優れてい

るだけでなく、さらに統制、方向づけをする力を有していることが必要となる。いずれにせよ内界の未分化なエネルギーを適応的な水準まで引き上げるためには、まずその動きを意識化することが前提となるはずである。

吉広 (1971)³¹⁾は、あがりの主因を自分に自信の持てないことであるといった立場から、「この自信のなさ、試合に臨んでの実力の欠如や、その日の調子の悪さからくる自信のなさではなく、ふだんの練習の時から、すすんで計画・実行することによって築かれた自分に納得がいくという“自信”である。……」と述べている。この見解をこれまでの結果から自我機能によって説明を試みるならば、L—SF群はH—SF群よりも自己実現に向わせる本能的、基本的エネルギーが豊かであり、しかもそのエネルギーを建設的に統制する資質にすぐれていると考えられる。このように、病的レベルで提出された解釈仮説に従って、本被験者のような健康レベルでの問題を探っていくには、さらに多くのデータの積み重ねを必要とするが、“あがり”という現象の一側面は、願望と現実の間に生ずるギャップを克服していこうとする、つまり自らの願うところ、望むところに向かって自らを形成してゆきたいといった自己実現²⁴⁾に向かう、健康な自我のもつ成長動機 (growth motives) と深くかかわっていると考えられる。

さらに、現実検証能力 (reality testing) を反映するといわれている[F L]形態水準について、両群の比較を行うことにする。ここでも粗点、加重点ともにL—SF群の方がH—SF群よりも有意に高く、L—SF群の方が現実検証能力においてすぐれていることがわかる。

非常に理論的、概念的ではあるが、Klopperは、この現実検証能力の障害と自我防衛 (ego defence) の強さとの関係を図示し、正常者から神経症者の間では、reality testing の減少に伴って ego defensiveness になると主張している。このことより、上述の結果は次のような解釈を試みることができると思われる。心的緊張場面に立たされた時、精神内界の安定を求める為にH—SF群の方がより防衛的行動をとりうるということが予想される。つまり、自我が積極的に環境に働きかけ、問題を

解決し安定を求めるといった行動ではなく、回避的行動になるわけである。また、このような防衛のためにエネルギーを消費しすぎることは、合目

的行動のために使われるべきエネルギーの減少になり、外界に対する支配性が弱まる傾向になるのではないかと考えられる。

Fig. 2 A profile of R, R₁T, and FL of each cards.

Fig. 2は、図版ごとに各被験者の平均形態水準を求め、それを代表値として、さらに各群ごとの平均形態水準を算出し図示したものである。また上限は、各被験者の平均形態水準の最高点であり、下限はその最低点を示すものである。さらにカードごとの反応数の平均[R]と、初発反応時間の平均[R₁T]も並記しておいた。今まで行ってきたのは、記号化を中心とした客観的・数量的解釈を進めてきたのであるが、ここでは、10枚の図版に対して与えられる反応を、時間的な流れのうちに、各図版の特性を考慮しつつ検討を加えようとするものである。つまり、このような継列分析(sequence analysis)の一端を試みることによって問題に迫ることになる。(基本的には、この段階も記号化を中心とした分析と考えることの方が妥当なのかもしれない。後半の症例検討においては、このような意味での継列分析が行われることになる。)

まず、両群の平均形態水準の推移をながめてみると、H-SF群の方が変動幅が大きいことがわかる。そして、その中でもVI、IXカードにおける形態水準の落ちこみが目立つようである。また、

図版ごとの平均反応数においては、L-SF群の方が一貫して多いことがわかる(全反応数の平均は、L-SF群 40.7, H-SF群 30.9であった。)。さらに、図版ごとのR₁T(Av. N. C.): R₁T(Av. C. C.)の比率を求め、R₁T(Av. C. C.)の値がR₁T(Av. N. C.)の値の2倍以上の被験者を拾ってみると、L-SF群においては、12ケース中1ケースであったが、H-SF群では12ケース中5ケースを抽出することができる。これのみで色彩ショック(color shock)ありと決定することは少々危険なことではあるが、H-SF群の者は、色彩によって何等かの影響を受け、反応の遅滞をもたらしたのであろう。

以上のような点を踏まえた上で、結果を考察してみることにする。H-SF群は、刺激の種類によって現実吟味の能力が低下し、またこのことは、色彩カードにおけるR₁Tの遅れから、外界からの刺激に対する情緒表出のコントロールに劣ることが推測される。つまり、L-SF群は、H-SF群よりも外界の変化に対する適応力においてすぐれていると言える。さらに、反応総数及びカードごとの平均反応数の比較より、L-SF群

の生産性の高いことがわかる。このようなL-SF群の精神活動の活発さは、先にふれたRPRSにおける〔M〕,〔FM〕反応の結果から解釈された、健康な自我の成長動機の高いことと関係しているようである。

(2) 症例の検討

これまでに行ってきたRPRSを中心とした両群の自我機能の比較は、法則定立的接近法(nomothetic approach)と考える。これから行われる2人の症例のロ・テスト解釈は、それまでに出版された一般的結果の個性化された姿を見出し、またそれによって、より妥当性の高い一般化を目指す個性記述的接近法(idiographic approach)と言える。

まず面接から得られた、スポーツ場面を中心とした“あがり”に関する行動の特徴的な側面にふれ、両ケースの紹介を簡単に行ってみることにする。

・Case H. (L-SF Group) 21歳 バレーボール選手 経験年数・9年 あがり得点・96

試合前に相手チームのことを考えるとどうしようかと不安になる時もあるが、実際にプレイを開始して相手のことがわかってくると、自分がどれだけのことをやればよいかわかってくる。そして、一つ一つのプレイをやって、ボールを追うことに一生懸命集中すれば不安がなくなるようである。このような彼の行動特徴は、現実検討能力

にすぐれ、課題解決への指向性の高いことを示すものと思われる。本症例はあがり得点(96点)、そしてコーチ及びチームメイトからの評定においてもL-SF群に属するものと考えられる。

・Case M. (H-SF Group) 23歳 バスケットボール選手 経験年数・9年 あがり得点・13 試合場面での記憶が少なく、何をしていたかということすらあまり思い出せず、また試合であがったという自覚はないが、後で考えると何か普段の練習と異なっており、あがっていたように思う。また日常生活は、「人前に出ると自信が持てない」「初対面の人とはあまり話さないようにしている」と彼が言うように、その臆病な性格の故に引き込みがちのようである。そのため自分の内界のものを外界の対象にぶつけ、それによって自分を知り意識水準を高め、自我を拡大し強めて行くということが少ないように思われる。

スポーツ場面でも日常生活と同様の心のメカニズムが働いており、自分から積極的に働きかけることなく、相手が何らかの反応をしているのにもかかわらず、その意識水準の低さと自我の弱さ故に、現実には生じていることを把握できず何が何だかわからないままにプレイをしてしまっている。つまり、あがっている状態でプレイをしてしまっているのである。以上のことから、本症例はH-SF群に属するものと考えられる。

Table 3 Rorschach protocol of the two cases.

Case H. (L-SF Group)	Case M. (H-SF Group)
<p>I 5" ①ハコウモリ。羽、ちょっとした手みたいな、それに黒いところ。 W FC'± A P</p> <p>②V漫画に出てくる悪魔の感じ。デビルマンに出てくる悪魔の胸の絵、形、模様が入っているところ。 dr, S F± Art</p> <p>③ハオオカミが遠ぼえしている。肩のあたりから、頭、鼻先を上にして口をとがらせて。 dr FM± Ad</p> <p>④V火山の地層図。山、マグマだまり、この筋が噴出してくるところ。 dr, S F±, cF Map 2'07"</p> <p>II 5" ①ハ象が向い合ってけんかをして、血を流している。耳、鼻、そんなに長くない足、この赤いところが血がついて流しているところ。</p>	<p>I 7" ①ハ大腿骨のよう。穴が開いていて、全体の感じで見たから。 W, S F± Atb</p> <p>②ハオオカミの頭。頭のへんなんですが、口のとがった、特にオオカミでなくてもよいんですが、獣みたいなもの。 dr F± Ad</p> <p>③ハ両手が出ている。こんなふうな手の形をしている。 d F± Hd</p> <p>④ハ結晶の感じ。ギザギザや散らばっているところが何かピーカーの縁についているようなもの。 dr F± Cry</p> <p>⑤V火山の溶岩が噴き出しているところ。火山が噴き出してできた山のように。噴き出しているイメージ。 d mF± Expl</p>

W FM±, CF, m A, Blood P

- ②△レントゲン写真の肺。肺の形, 白い部分と黒い部分があるところ。

D F k± X-ray

- ③△エビが向い合っているよう。足, 頭の方がそり返っている。エビはだいたい赤いし。

D FC±, FM A

- ④△洞くつの入口。岩場の中で, その所だけがポツカリと穴が開いている。

D, S FK± Lds 2'33"

- 5" ①△土人が向い合ってタイコをたたき合っている。手でタイコをたたく, 黒いところもあるし足が細く腰を曲げた格好。

D M±, FC' H P

- ②△ハニワみたい。大きな目, 黒い外回りで胴が太く手が体のわりに細い。

D F± (Hd)

- ③△血が流れ出たところ。赤いし, ボトンと落ちてそれが流れ出たところ。

D CF, m Blood

- ④△トナカイが背中合わせ。角, 目, 口, 鼻先が他のところより少し黒い。

D F±, Fc Ad

- ⑤△胃袋と心臓。赤くて, 形の感じが似ている。

D FC± Ats

- ⑥△土人が刃を持って背中合わせ。刃, 頭に飾りか何かを付けて, 黒いし首が細長い。

D M±, FC' H 2'40"

- N 20" ①△大男が寝そべっていて, 足の方から見ただころ。大の字になって寝ている。

W M±, FK H

- ②>犬がへビに向かってほえ立てている。犬, 口, しっぽ, それにここがへビ。

d + d FM± A

- ③△人の顔。横顔で, 口, 鼻。

dd F± Hd

- ④△パンジーの花。色の濃淡, 筋が入っていて, 花びらだけが見える。

d Fc± Pl

- ⑤△水か雪か何かがなだれみたいに押し寄せて来る。上から流れて来て手前の地面にあたって広がっている。木が倒されている。

W KF, m Lds 4'35"

- V 3" ①△チ。ウ。触角, 羽。

W F± A P

- ②△魚の口の長い, それが重なり合っている。魚自体は黒いし, 尻尾の方はお互いにどっちが上かわからな

- ⑥△オオカミの頭に続いているところが, さっきからわからなくて, 何か口ばしのような。先の方がとがっていて大きい口ばしという感じ。

d F± Ad 2'51"

- II 15" ①△骨格類, エビや何かのゆで上ったもの。触角, 赤いからゆで上ったように感じる。

D FC± Ad

- ②△上の赤い方が, 黒と赤の間へんが人間の足首。特にこのへんのラインの感じ。

dr F± Hd

- ③△人間が腰かけているところを下から見ただころ。お尻, 圧力がかかっているところは色が濃く, 足はだらんとなっている。

W F±, cF, m Hd

- ④△小熊の顔。鼻, 目, 全体に黒いです。

dr FC'± Ad 2'56"

- III 3" ①△女の人に向い合っている。最初は物を持ち上げているように見えたんだけど, ゆっくり見ると後で言ったツボに水をくみ上げているみたい。

D M±, FC' H P

- ②△鹿や何かの足。足のイメージ, 爪のところが薄くなっている。ヒツメ。

d F±, cF Ad

- ③△タツノオトシゴ。頭の曲り具合, しっぽ。

D F± A

- ①'△何かツボに水をくみ上げている。女の人に見えると言っても日本人じゃなくてアフリカの女性みたい。

- ④△怪獣のカ=星人。頭, 目, 腕, 目のへんが特に悪者のような感じ。

D F± (Hd) 3'48"

(真中の赤いのは見なくちゃいけないけどわからないが, 何かある感じ。だけど何かわからない)

- IV 18" ①△恐怖映画のポスター。悪魔映画のイメージポスター。このへんの垂れているところが, 何か邪悪な感じ。

W F± (H)

- ②△大きなドタグツ。カカト, つま先。こっちをつけると, ユーモラスな感じがしてしまうので, これはこれだけ。

D F± Obj

- ③△花卉。模様の感じが陽に透けたよう。

d Fc± Pl

- ④△角。こっちが根もとの方で, 先がとがっている。

d F± Ad

- ⑤△人の形。上が簡略化されて足だけが意識化されて書かれた感じ。

W FK± (H)

- ⑥△根が弱っている木。ここが細くなって不健康さを感じる。

D F± Pl 3'45"

い。

D FC' F A

- ③Vコウモリ。色が黒くて、羽、頭。

W FC' ± A P

- ④V人の足がダランと下がっている。何かにぶら下がった時に足だけを見たところ。

d F ±, m Hd 3'45"

- Ⅵ 14" ①ハキツネの毛皮。ヒゲ、手、足、全体に広げられていて輪郭の感じ。他にフワフワした感じ。

W F ±, Fc Aobj P

- ②V天狗のお面。鼻、髪の毛がこの辺で、2つある。

D F ± Mask

- ③Vカエデの葉を持ちながら、その向こうの方に炎が上っているのを見ている。茎の向こうに炎が、方々に広がっているところ。

W FK ±, F Pl, Fire

- ④ハ深い溝というか、きれつができたところ。クレパスを上から見て、ここが一番深いところ。

dr FK ± Lds

- ⑤<北海道の地図の半分。北海道の下の方で、半島の感じがする。

dr F ± Map

- ⑥V引っかけもの。カギ形をしている。

dd F ± Obj

- ⑦V虫がちょっとだけ足を見せている。お尻、足。

d F ± Ad 5'03"

- Ⅶ 13" ①ハウサギが首だけ回して、体は動かさず正面を向いて向き合っている。耳、手というか足、特に耳の感じがウサギ。

D FM ± A P

- ②ハ下から風を受けて髪が上に上がったボニーテールに見える。人の顔だけで。

D Fm ± Hd

- ③V漫画に出てくるオオカミ。鼻、口、目、顔だけ。

D F ± (Ad)

- ④Vタコの足1本ずつ、このブツブツは吸盤みたい。タコの足、丸い吸盤。

D F ± Ad

- ⑤<一本の角のある鬼。角、目、口、鼻。

D F ± (Hd)

- ⑥<水痘症の子どもがいるな。頭が全体に大きく、目、鼻、口。

D F ± Hd 4'36"

- Ⅷ 14" ①ハイタチ。足を大地につけてゆっくり歩いているみたい。4本の足が歩いている感じ。

W FM ± A P

- ②V何かの動物の頭がピシャンとつぶれた感じ。目、

- V 10" ①ハチ・ウチ。胴体、羽。真中のふっくらしたところがポテポテと言うか、チ・ウの感じ。

W F ±, cF A P

- ②ハピンセット。開いた感じから。

d F ± Obj

- ③ハ動物のモモ。尻からモモ。何か野生の動物の感じ。

dr F ± Ad

- ④ハ獣の口と鼻。横顔に見える。口、鼻。

dd F ± Ad

- ⑤ハ人の口を開いた横顔。口、目、鼻で口を大きく開いているところ。

dr F ± Hd 3'00"

- Ⅸ 24" ①ハメシベ。この太いところだけで回りはじゃま。普通はオシベがあるんだけどそれが無い。

D F ± Pl

- ②<ピストル。握るところ。こっちの方が銃身。

D F ± Obj 1'56"

(何もわからないな。何か訳がわからないな。)

- Ⅹ 5" ①ハ髪の毛を高く結った女の子の置き物。髪を上げて首を突き出している。何か人形のよう。

D F ±, m (Hd)

- ②ハ魚が口を合わせている。ここが口で両方からくっついている。

D FM ± A

- ③ハオオカミ男。角、目、鼻。目とキバの感じからまぬけのよう。

D F ± (Hd)

- ④ハしっぽ。このギザギザの感じとしっぽが立っているように見える。

d Fm ± Ad

- ⑤V歌舞伎の前髪。真中から分かれて、前に垂らした

W F ± Hair

- ⑥V動物の顔。横から見たところで、鼻、目。

D F ± Ad 4'00"

- Ⅺ 12" ①ハ4つの足の動物が、この色の固まりとこの色の固まりとの間が結構空いていて、足の形からも、こっちからこっちへ行こうとしている。

W FM ± A P

- ②ハプランクトンの顕微鏡写真。色と何か訳のわからない形から。色の違うのがはいつているから。何か体内に取り入れたところ。

D KF ± A

- ③ハ国旗。ここが支柱で四角い旗。

D F ± Obj

- ④ハ岩。この動物からきているんだけど、何か形の感じから。

D F ± Stone

- ①>動物が何かある状態から新しい環境に跳び立とうという感じにも見える。

- ⑤V抽象画。今まで黒かったが、ここで急に色々の色が使

口, 平べったくなって, 目が離れている感じ。

D F ± Ad

- ③ V のれんみたい。真中だけ垂れ下っている。四角い形をしていて, ヒモでつってあるところ。

D F ±, m Obj

- ④ V 人の手がさっき言ったイタチみたいなものの手をつかまえている。手だけで, 足をつかんでいる感じ。

dr M ±, F Hd, A

- ⑤ V 人の胸だけで筋肉が出ている。肩, 胸の筋肉。赤いのが筋肉を連想して。色が少し違うので盛り上がりを感じず。

dr F C ±, Fc Hd 4'43"

- Ⅸ 20" ① A 鼻だけ大きい人を横から見たとこ、アゴあたりにイボがある。漫画的に書いたもので, 目, 鼻, 口, アゴ, イボ。

D F ± (Hd)

- ② A リンゴが4つ, その中の2つは半分だけ見えている。色と形から。

D F C ±, FK Pl

- ③ V キノコ雲のよう。フワフワとこんな風に出ているところが。

D KF Cloud

- ④ V 柿か何かの汁がついたしみ。色からで柿の汁が落ちて広がった感じ。

D CF Stain

- ⑥ V 破れたカサで, その破れたところから向こうが見える。これがカサの上のところで, 破れていて, 向こう側も破れていて見える。

D, S F ±, FK Obj

- ⑧ A 人が枯れた木を倒そうとしている。人, 枯れ木, 倒そうとしている。

dr M ± H, Pl 5'20"

- X 21" ① A 小さな悪魔が相談し合っている。手, 足, 目, 向き合っている。

D M ± (H)

- ② A 竜の頭。目の感じで何となく, 角が出ていて。

dr F ± (Ad)

- ③ A 木の種が落ちてくるところ。小さいのがフワフワ落ちてくる。色の感じも。

D Fm ±, FC Pl

- ④ > 背の曲った老人がゴツゴツした岩の上を歩いているところ。岩, 手を後に組んで背が曲っている。

D M ± H

- ⑥ A 球根から沢山の芽が出ている。この出ているところが何となく芽の伸びたところ。

D F ± Pl 4'20"

ってあってきれい。意味が有りそうで無い。

W CF Art

- ⑥ A 人の手。さっきの動物の足をつかんでいる感じ。

dd M ± Hd 4'32"

- Ⅸ 48" ① A 骨の残がい。残がいというのは先の方のカドがとれていて丸くなっている。無くなりかけてる。

d F ± At

- ② A それに続く上の方は, 金属の機械の一部。穴が2つあいているところ。

dd, S F ± Obj

- ③ A それに続くところは, 生物体の一部。色が薄くなっていて肌色っぽいから。

dr C Ad

- ④ A 果物。モモかリンゴ。色と丸味があって。

D F C ± Pl

- ⑤ A ワイングラス。この形とグラスの柄の長いところ。

D F ± Obj

- ⑥ A 取っ手。何かの容器。特にこの穴のあいたところが持つところ。

D, S F ± Obj

- ⑦ A 植物の断面図。この色の違いから断面図。何か植物のよう。

dr CF Art

- ⑧ A ボール, オワン。上の方が広くて中がへこんでいるところ。

D F ± Obj 4'50"

- X 12" ① A 虫歯菌。漫画化された形で, 角, 足, 体, 2 ひきいる。

D F ± (A)

- ② A 水草の藻。ごちゃごちゃしていて, 真中が丸っぽくて色の感じから。

D CF Pl

- ③ A 虫歯菌と同類の良くない生物。顔が2つになって横顔みたい。

dr F ± (Ad)

- ④ A 木の根あるいは茎から葉, 根とか茎から若葉が出たところ。

dd F ± Pl

- ⑤ A 人間の一部分に攻撃をしかけている。色の感じから何か組織。さっきのこれが悪者に見えたから他のものも何か皆それに向っているよう。

W FM ±, CF (A), Hd

- ⑥ A 魚。これが目で, 細長い魚の感じ。

C F ± A

- ⑦ A 小鳥。目, 口ばし, 頭がやや大きくて。黄色と赤のコントラストから何か小さい生物。

D F ±, Csym A

- ⑧ A カエデの実。マツボックリの中に入っている種子。色からカエデと言ったのかな。

D F/C Pl 5'03"

Summary Scoring

 $R=53 \quad R_1T(Av.)=12.0 \quad W:D=10:32$
 $W:M=10:8 \quad \Sigma C:M=4.75:8$
 $FC:CF+C=4.5:2.5 \quad FM:M=5.5:8$
 $Fc+c+C':FM+m=7:10.0$
 $F+\%/ \Sigma F+\%/R+\%=95/96/89 \quad P=8(15\%)$
 $CR=13 \quad DR=8$

Summary Scoring

 $R=55 \quad R_1T(Av.)=15.4 \quad W:D=9:33$
 $W:M=9:2 \quad \Sigma C:M=7.25:2$
 $FC:CF+C=3:4.5 \quad FM:M=2:2$
 $Fc+c+C':FM+m=4:6$
 $F+\%/ \Sigma F+\%/R+\%=73/76/67 \quad P=3(5\%)$
 $CR=10 \quad DR=8$

ここで取り上げられる2つの症例のロ・反応解釈は、両症例の人格特徴を全般的にまとめあげてことを目的としたものではなく、スポーツ場面での“あがり”の説明を意図することを基本的なわく組にもっているのである。したがってここでは、ロ・反応プロトコルを個々に独立して解釈を行わず、両者の反応における差異に注目しながら解釈を進めた方が、あがりの個人差と自我機能の関係をより明確にできると考えている。

まず初めに、これまでに分析してきたように両者のRPRSによる比較を行った。その結果、H君の粗点(M=6.5, FM=5.0, m=1.5, Sh=3.5, Col=4.0, FL=1.42, Sum=21.92), 加重点(M=3.0, FM=2.0, m=1.0, Sh=1.5, Col=2.0, FL=0.42, Sum=9.92), 予後評定総点はⅡ段階であった。そしてM君の粗点(M=2.0, FM=-1.0, m=0, Sh=1.5, Col=3.5, FL=0.75, Sum=6.75), 加重点(M=1.0, FM=-2.0, m=0, Sh=1.5, Col=1.5, FL=-0.25, Sum=1.75), 予後評定総点はⅣ段階であった。RPRSにおけるこの両者の比較は、先に行われた結果と同じような傾向を示している。あがらない症例であるH君の方が、[M], [FM], [FL]を中心に高い値を示し、また自我の諸機能の統合状態を反映する[Sum]においても明らかな差が認められる。したがって、H君の方がM君よりも自我の強さや健康さにおいてすぐれていることがわかる。

Table 3. に示すように両症例ともに、R, Content Range, Determinant Range は正常成人の平均値を上回るものであり、生産性・創造性ともに高く、また検査に対する協力、関心が高かったことが推測される。しかしながら、その生産性・創造性についてさらに詳細を吟味していくと、両者の質的差異が明らかになってくるようである。両者のロ・反応プロトコルからわかるように、カ

ードごとの反応内容(主題)を比較してみると、いくつかの共通点に注目することができる。例えば、H君のCard I. におけるRes.③とM君のRes.②, そしてRes.④とRes.⑤がそれぞれである。ロ・カードが刺激となって生じた精神内界の欲動(drive)・衝動(impulse)に対して、両君の自我がどのようにしてこれに対応しているか、つまり、両者の自我化(egotization)の水準を知るうえで、このような共通点がさらに有効になると考えられる。

ロ・テストにおける第Ⅰカードへの反応は、新奇な場面に対してその人がどのような行動をとるかを予測する手がかりになると言われている。両者のⅠカードにおける反応を比較してみると、M君の方は、形態反応のみが先行しており、しかも形態水準の低い反応が見られる。また、反応内容に不快・不安定感を示唆するものもある。このことは、新奇な場面への最初のかかわり方が、外わくのみをとらえ、内面の情緒的付加を交え積極的に働きかけ、関与するといった適応様式をとるものでないことが推測される。つまり、一歩退き距離をおいた状態で安定を求めていると解釈される。このようなところは、先の面接から確かめられた臆病さに通ずるところのようである。

上述のような情緒的側面は、色彩反応を中心としたその出現の仕方、内容の検討を加えることによってさらに吟味することができる。第Ⅱカードの第①反応について、H君は攻撃的な反応内容を伴いながらも色彩を全体の中に取り込みP反応を構成しているが、M君の場合、部分領域の色彩にのみ注目あるいは刺激されて反応をしている。さらに第Ⅲカードの反応を比較してみると、スコアリングの上での両者に大差は見られないが、M君の反応継起は特徴的と言えるようである。初発

反応時間48秒と、そして自由反応段階での領域への部分固執が見られることより、色彩ショックを疑うことができる。このような固執傾向は、第Ⅶカードの中で自発的に述べられた、「一度僕は木に映っちゃうとそれにしか見えなくて、逆にしても……」(Table 3. には記していない) によっても知ることができる。このことから、M君の方が易刺激的であり、外界の情緒的刺激のコントロールに劣ると解釈することができる。しかしながら、このような color schock や部分固執がありながらも、最終的には形態反応を中心に現実検討を加え回復しているところは、M君の病態水準を正常範ちゅうで考えてもよいことを示唆する一つと思われる。

確かに、外界の情緒的な要請に適合した感情や動作でもって反応しようといったところでは、 $[FC : CF + C]$ の比率からもH君の方がM君よりすぐれていることは明らかである。だが外界の刺激の強度が増し、複雑化した状態でもH君がそれまでと変わりなく行動できるかどうかは疑問のようである。それは、H君のXカードにおける反応に全体反応が無いこと、多彩色カードであるにもかかわらず、カラーを取り込んでいないことなどから、そのように考えないわけにはいかない。恐らく彼の場合は、強いコンフリクトな場面に遭遇してもお手上げの状態にはならないであろうが、適応の水準はやや低いものではないかと予想される。つまり内界の一応の安定が果されても、それがかならずしも外界から要求されるものを満たすものとは限らないことがあるかもしれない。

M反応, FM反応に関連する両者の差異についての解釈は、前述のRPRSのところで行われたものと重複するところがあるが、両者間の際立った差異としてさらに検討を加えることは大切なようである。M君の $M=2$, $FM=2$ は、反応総数($R=55$)から考えるとやや少ないようである。また、12個の人間に関連した反応内容(content)を出しているが、そのうち11個は非現実的人間反応あるいは人間部分反応である。これらのことは、やや活発な生命力に欠け、内的統合力が低く、また対人関係面での非積極性などを推測する手がか

りとなる。一方、H君の方は対称的に、 $M=8$, F
 $M=5.5$ と本能的欲求や内的な衝動性が高く、それを統合する能力も高いようである。彼の $[M=8]$ で示される知的生産性・創造力の高さ、観念的世界の活発さは、ストレス状態におかれた時に、彼自身のなかに避難し、統制しえない衝動を回避することを可能にする内的手段となるものである。このようにH君の場合、内的世界が活発であることは、反対人関係の中で個性的、恣意的な側面も考えられることになるが、客観的に物事を認識する態度もプロトコルから知ることができる。

最後に、両者の体験型(experience balance)にふれることにする。体験型の指標としては、 $[M : \Sigma C]$ を基本とし、それを補うものとして $[FM+m : Fc+c+C']$, $\text{Ⅷ} + \text{Ⅸ} + X/R$ が考えられている。Summary Scoring に示してあるように、H君は基本的には内向性(introversion)であり、M君は外向性(extraversion)と言えるようである。この結果は、従来の向性検査より提出されている、「あがりやすい人の性格は内向的である。」といった見解²⁸⁾に反論するものではない。これはロ・テストから導き出される体験型と、従来の向性検査で明らかにされる内向性—外向性とは性質の異なったものであることに帰因する²⁹⁾。Klopper (1962) は、「よく適応した内向性の人は、ひっこみ思案であったり、内気すぎたりはしない。その人は自己充足的である。」と主張している。H君における $[\Sigma C : M=4.75 : 8]$ は、確かに比率から考えると上述したように内向性として位置づけられるが、 $[\Sigma C=4.75]$, $[FC=4.5]$ からも示されるように、外界に対する反応性や関与は十分に認められる。そのような意味からも、H君の体験型は、内向性を基本としながら両向的体験型をも備えもっているものと考えたい。M君は、外界から加えられた力に対する反応性は高いが、それを積極的に自分自身の価値体系や要求に関連して外界を再構成する程ではない。そんなところから外向性と考えるわけであるが、 $[Fc+c+C' : FM+m=4 : 6]$ で示される、認知されない水準での体験型との不一致が見られる。意志的・随意的な内界の統合の指標である $[M=2]$ を

上回るmやcの強調は、緊張・葛藤の存在を認めることができる。ところが Summary Scoring で示しているように、H君もその数は多く、M君を逆に上回っていることがわかる。しかしながら、H君の場合は、一次的形態反応が多くをしめていること、そして[M]や[F K]の存在を考え合わせると、M君とは違った解釈を下すことが必要となってくる。内界の動きに対する感受性が高く、しかもそのエネルギーを建設的な方向へと移し換えていく内省力、洞察力が高いと言えるようである。

“あがる”運動選手のパーソナリティをロ・反応からとらえようとした時、このm, cに対する解釈も重要な位置をしめるのかもしれない。この分類から推論される人格的側面は、自我発達段階の比較的早期に獲得されるものと考えられており、深く解釈を進めていくには、他からの情報（例えば、生育史に関するもの）が必要となってくる。このようなことから本考察の中では、これ以上の知見を提出することができなかった。

結論と今後の課題

筆者等は“あがり”を、外界の圧力あるいは無意識的衝動による「一過性の自我の機能的不全」であると現象的にとらえ、さらに適応論的な立場から、「防衛的な情緒的自我反応」であると考えた。これらのことを出発点として、ロ・反応に投影された自我機能から、あがりの個人差について実証的研究を進めてきた。

あがらない運動選手の自我機能は、本能的欲求や内的な衝動性の知覚、そして現実を正確に把握する能力にすぐれていた。また、自らの願うところ、望むところに向かって自らを形成してゆきたいといった自己実現の機能にすぐれていた。これらをより一般的に言うならば、あがらない選手の方があがる選手よりも、総じて自我の強さ・健全度が高いと結論づけられる。このような結果から、運動選手が試合等で経験する“あがり”を克服する一自我体制の維持一には、対象（外的状況要因に端を発する広い意味での心的対象）からくる不安を許容できる程の観念的世界の活発さ、豊かさが必要であろう。そして、さらに現実適応的

に働きかける強さをもった自我機能が必要と考えられる。

一口に、対象からくる不安と言ってしまったが、具体的には選手個々によって異なってくるものが予想される。その意味からも、あがる選手個々の症状について深く検討することが必要となってくる。また本研究の中では、この不安を具体的に自我形成の段階の生育歴と関連づけ、力動的説明を試みるまでの情報を得るには至らなかった。今後は、臨床心理学的な技法の訓練を重ね、この種の問題に対してアセスメント (assessment) のみにとどまることなく、治療的なかわりを行った事例報告の積み重ねをすることが有意義となるう。

注

本研究の対象者の抽出にあたり、両群を代表する対象群であることの適切さが問われる。それは、対象者の競技力、経験度、社会的地位等により、“あがり”の質・量に差異をもたらすのではないかとということが考えられる。本研究等は、上述のような付帯条件によってもたらされるあがりに関する心理的相違は、あがりの種類（質）の相違というよりもむしろ程度（量）の相違の方が大きいのではないかと考えている。したがって、本文中で示したような手続き（付帯条件に関する規定）で抽出されたH-SF群、L-SF群の両群内におけるあがりに関する量的近似は、完全に保証されたものではないかもしれない。このようなことから、H-SF群：あがりやすい選手群、L-SF群：あがりにくい選手群といった意味合いが含まれていることになる。以上、対象者抽出においてやや問題を含んでいることになるが、両群の一般的差異を知る目的に対し、本研究で用いた抽出方法は、一応耐え得ると考えられ採用された。

引用・参考文献

- 1) Adams, H.B. and Cooper, G.D., "Three measures of ego strength and prognosis for psychotherapy," *Journal of Clinical Psychology*, 18: 490-494, 1962.
- 2) Barron, F., "An ego-strength scale which predicts response to psychotherapy," *J. Consult. Psychol.*, 17: 327-33, 1956.
- 3) Beres, D., "Ego deviation and concept of schizophrenia," *The Psychoanalytic Study of the Child*, 9: 75-127, 1954.
- 4) 別宮 哲「自我の強さの各段階における自我機能の特徴—ロールシャッハ予後評定尺度の諸研究」心理学

- 評論, 19-4: 273-07, 1976.
- 5) Blanck, G. and Blank, R., *Ego psychology-theory and practice*, Columbia Univ. Press, 1974.
 - 6) Cartwright, R.D., "Predicting response to client-centered therapy with rorschach prognostic rating scale," *J. Consult. Psychol.*, 5: 11-17, 1958.
 - 7) Cattell, R.B., *The sixteen personality factor questionnaire*, Champaign, Ill: Institute for personality and ability testing, 1958.
 - 8) 浜 治世, 実験異常心理学, 誠信書房, 1969. pp. 224-26.
 - 9) 堀尾治代「自我の強さの尺度に関する一考察—Barron のEs スケールとRPRSの関係について—」*心理学研究*, 44-5: 233-40, 1973.
 - 10) Hurvich, M. and Bellak, L., "Ego function patterns in schizophrenics," *Psychological Reports*, 22: 299-308, 1968.
 - 11) 市村操「あがる心理 あがらない心理」*児童心理*, 19-5: 115-19, 1965.
 - 12) 市村操「スポーツにおけるあがりの特性の因子分析的研究」*体育学研究*, 9-2: 18-23, 1965.
 - 13) 河合隼雄・山本昭二郎・宇佐晋一「ロールシャッハ予後評定尺度の妥当性に関する一研究—森田療法を対象として—」*ロールシャッハ研究*, 1: 95-106, 1958.
 - 14) 河合隼雄, 臨床場面におけるロールシャッハ法, 岩崎学術出版, 1969. pp.97-103.
 - 15) Klopfer, B., Kirkner, F.J., Wishan, W., and Baker, G., "Rorschach prognostic rating scale," *Journal of Projective Techniques*, 15: 425-28, 1951.
 - 16) Klopfer, B., Ainsworth, M.C., Klopfer, W.G. and Holt, R.B., *Developments in the rorschach technique*, vol. I, World Book: N.Y., 1954.
 - 17) クロッパー (河合隼雄訳), *ロールシャッハ・テクニック入門*, ダイヤモンド社, 1964. pp.278. (Klopfer, B. and Davidoson, H.H., "The rorschach technique-an introductory manual", Harcourt, Brace & World, Inc., 1962.)
 - 18) 松田岩男・清原健司 (編著), *スポーツの心理*, スポーツ科学講座・6, 大修館書店, 1966. pp.160-65.
 - 19) 松井三雄, *体育心理学*, 杏林書院, 1968. pp.192-93.
 - 20) 永井 徹・水谷由美子・小川捷之「青年期における自己意識と自我機能の関係について—悩みに対する構えの比較—」*ロールシャッハ研究*, XXI: 29-40, 1979.
 - 21) 中西信男・古市裕一「自我機能に関する心理学的研究—自我機能調査票の開発—」*大阪大学人間科学部紀要*, 7: 189-220, 1981.
 - 22) 小川捷之「自我の強さ (Ego strength) の測定に関する研究—その1—」*東京教育大学教育学部紀要*, 11: 107-22, 1965.
 - 23) 小川捷之「自我の強さ (Ego Strength) の測定に関する研究—文献的研究—」*東京教育大学教育相談所紀要*, 7: 67-84, 1965.
 - 24) 小川捷之「勝利志向の構造—心理学的考察—」*新体育*, 46-7: 548-52, 1976.
 - 25) 小此木啓吾「精神分析学の展望—主として自我心理学の発達をめぐって—」*精神医学*, vol. III, no. 5, 6, 8, 11, vol. IV, no. 1, 1961-1962.
 - 26) 真田英進「脳性マヒ児の Ego Strength に関する研究—R.P.R.S. による—」*心理学研究*, 45-3: 156-59, 1974.
 - 27) 多田治夫「学生相談におけるロールシャッハ予後評定尺度の妥当性」*ロールシャッハ研究*, III: 90-98, 1960.
 - 28) 竹村 昭・岡沢祥訓「Eysenck のパーソナリティ理論とスポーツにおける「あがり」の関係」*奈良教育大学紀要*, 28-1: 161-67, 1979.
 - 29) 田辺節子「ロールシャッハ・テストとMP I, 及び人間タイプテストの比較—特に向性指標を中心として—」*ロールシャッハ研究*, XVIII: 73-87, 1967.
 - 30) 田中千穂子「自我機能からみた夢想起 (dream recall) に関する研究」*ロールシャッハ研究*, XXII: 71-89, 1980.
 - 31) 吉広香与子「ロールシャッハテストによるあがる選手の性格特性に関する考察」*昭和46年度東京教育大学体育学部卒業論文*.